



卓 話



「日本と中国—相互理解と歴史認識 複雑な歩みから読み解く日中関係の難しさ」

早稲田大学社会科学総合学術院教授 劉 傑氏

—はじめに 存在感を増す中国とどう付き合うか—

金融危機への中国の対応。朝鮮半島問題における中国の役割。日本の世論の変化。



I. 「日本から見た中国」と「中国から見た日本」

日本から見た中国の歴史認識問題へのこだわりを挙げると、①領土・資源問題 ②軍事的脅威→軍事予算の拡大と透明度の低さ、周辺国、地域への対応 ③大国意識の台頭（「中華思想」の再来）④国際的なルールの無視（知的所有権、環境問題、食品安全の問題）などがあり、中国人は部分的にしか日本をみていない。

中国から見た日本は、①領土・資源問題 ②台湾問題への対応など歴史認識に問題があるが、日本人は中国のことが理解できない。

中国人への質問で「日本人と言えば、まず誰を思い浮かべるか」

1997年2月「中国青年報」：1東条英機 28.7% 2橋本龍太郎 12.8% 3山本五十六 12.1% 4田中角栄 11.2% 5松下幸之助 5.0%

2002年9月「朝日新聞」：1小泉純一郎 15.8% 2田中角栄 9.8% 3山口百恵 8.8% 4東条英機 8.6% 5山本五十六 5.3%

日本のイメージは、歴史、経済、「動画」

中国人は感謝を次のように例える：「滴水之恩」、「井戸を掘った人」四川地震の時の日本の支援は認識を変えた。恩は忘れない。

II. 中国に発する問題をどのように考えるか（人権、民族問題、知的所有権の問題、環境問題、食の安全の問題など）

- ①蓄積のない「近代化」⇔ヨーロッパと日本
- ②経済産業面における速すぎた「近代化」と近代国家としての意識の隔たり
- ③現実の中国に対する中国人の錯覚と国際社会の錯覚 中国人→大国意識の膨張

④国際社会→国際的なスタンダード、ルールに中国も対応できるはず

⑤体制、制度、国民意識の近代化は長期間を要する

⑥「中国的民主主義」の可能性

III. 歴史認識問題は日中関係のアキレス腱

なぜ歴史問題が発生するのか——日中のギャップを考える

1. 政治、社会的問題

①アメリカの要素：いわゆる戦後処理は、冷戦構造が形成する中で行われた。日本の主体性が奪われた。

②ヨーロッパの和解のインパクト：ドイツが示した姿勢は、中韓の対日不満の理由になった。しかし、日本では、ドイツと日本は比較できないという認識。

③今日的な問題：毒ガス弾の被害

④中国の変化、世論の影響（日中共同声明：「中華人民共和国政府は、中日両国国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄することを宣言する」）

⑤グローバル化のなかの各国のナショナリズムの台頭

⑥台湾問題の未解決：近代以降の日本との戦争を連想させる。

2. 歴史感覚の相違

⑦日本と中国、違う過去との対話：現在の政治、社会、国際関係などを理解するとき、日本と中国はいつの歴史と対話しているのか。日本は1945年からの「戦後」で、中国は1911年からの「近代化」と「統一国家建設」。日中関係史における「反日教育」の問題。いわゆる教科書問題、歴史教育の問題は、近代日中関係史を貫く問題。民国元年の反日教科書調査。

⑧「事件」として理解する日本、「事変」として理解する中国(incident)

事件は意外なできごと、もめごとで偶発性のものだが、事変は人力で避けられない出来事のことです。計画性、必然性、一貫性を主張する中国側の論調と、偶発性を主張する日本側の見解の違い。「田中上奏文」の問題と「盧溝橋事件」への解釈をめぐる対立。

⑨全面戦争に臨む姿勢の落差。

3. 教科書と違う新しい歴史観の浸透

「反帝反封建は中国近代史のメインテーマ」から「近代化は中国近代史のメインテーマ」

⑩袁偉時・中山大学教授の主張は、

「1970年代末、反右派闘争、大躍進、文化大革命など、史上空前の三大災難を経て、人々は痛みの中で、こ

これらの災厄の根源の一つが、「我々が狼の乳で育った」ことであると気づいた。それから20年以上が過ぎたある日、私はふとした機会に中学の歴史教科書をめくってみて驚いた。今も青少年が狼の乳を飲み続けているとは！このことは、近代中国と外国・外国人との関係の記述において、まるで反省の姿勢が無いという点で突出している。中国の近代史は「前近代的な社会から近代的な社会への転換を実現し、自由、民主、法治、文明、富裕、独立の近代的国家を建設すること」「反帝反封建」はこの的を実現するための手段に過ぎない。

「改革開放以来20余年をへて、中国大陸以外の内外の中国近代史学者の著作だけで100点以上刊行されており、大陸の若手一流学者の著作を加えるなら、頑迷固陋な見解はとっくに自然淘汰され、陳腐な結論を本気で信じる学者はごく稀になっている。一部の学校の歴史教科書、とりわけ中学のそれは、今では陳腐な見解の最後の牙城になっている」

② 釜松華東師範大学教授

歴史のコンテクストの中で歴史を語る。歴史学は、政党、民族、国家を超越するものでなければならない。人物を如何に評価するか。孫文は愛国者か。孫文が認識した「中国」と現在の「中国」は違う。（台湾を含む中国の領土を如何に認識するかの問題が発生する）。

中国近代史の問題は、革命と不革命ないし、反革命の問題ではなく、如何に近代化を追及するかの問題である。1927-37年、国民党はこの課題に真剣に取り組んだが、

共産党はこの課題に取り組まなかった。時代の流れにそぐわなかったのは、共産党のほうであった。

III. 中国を考えるいくつかの対立する概念

1. 内と外：国内安定と国際協調を同時に追求する中国は「内の論理」と「外の論理」
対外（タテマエ）は一つの世界、一つの夢。対内（ホンネ）は民族の復興。
2. 法治と人治：人治のメカニズムで法治の目標は達成できるか。
3. 放と収：放＝自由化 収＝引き締め。 放：制度改革・学術、民主党派、中央政府。 収：政治改革、メディア、共産党、地方政府。
4. 官と民：対立する構造が一層鮮明に。しかし、民の世論の代表である「精英」は官と同盟関係にある。協調の道はあるか。
5. 地方と中央：中央政府は○、地方政府は×、問題を地方政府の無責任と無能力に帰している。
6. 都市と農村：都市の満足感と農村（農民工、出稼ぎ農民を含む）の不公平感。が、農村の不公平感の代弁者は少ない。
7. 統一と分離：台湾問題、チベット問題、新疆問題など。

終りに 日本の政権交代、世代交代と日中関係

歴史にこだわりのない新しい世代。 交流の拡大は相互理解の増進となるか？